



ゴシック体の太字は、子供用に読む文です。

今日の紙芝居は「てんしょういんあつひめ天璋院篤姫」という人の

お話です。

皆さんは「篤姫」という名前を聞いたことが
ありますか？

そうですね、今年(平成二十年)のNHKの大河ドラマで放映されていますので、知っている人も多いと思います。

江戸徳川幕府、第十三代將軍家定いえさだの御台所みだいどころ
だったのが、今日の紙芝居の「篤姫」です。

江戸時代は將軍様と結婚すると、奥様は御台
所と呼ばれるようになりました。

実はこの「篤姫」は、皆さんと同じように
日蓮正宗の御本尊様を信仰をしていました。

総本山第五十一世日英上人にちえい様から御本尊様
を御下附ごかふいただき、信心を貫つらいていきました。

將軍の御台所、そして大奥の総責任者とし
て、信心を基本に江戸時代最後の大奥を、取
り仕切っていた「篤姫」のお話しの始まり
です。



九州の南、桜島で有名な鹿児島県は、昔、薩摩の国と呼ばれていました。

人々はその薩摩のお城を、鶴が羽を広げた姿に似ているところから、鶴丸城と呼んでいました。

その鶴丸城のほど近いところに、今和泉島津忠剛の屋敷がありました。この今和泉家は、薩摩藩主島津家の分家でありました。

天保六年十二月十九日のことです。その今和泉家に、とても可愛く、とっても元気な、女の子が産まれました。

名前を「於一」といいました。この子が後の篤姫です。この篤姫が將軍の御台所となり、江戸時代の最後を取り仕切り、徳川家を救う大きな役割を果たそうとは、誰も想像できませんでした。

「この子も、いつかお嫁に行ってしまうんでしょうね」

「いや、嫁になんか行くものか、いつまでもわしのそばにいてくれよ、なあ於一？」

お父さんも、お母さんも、初めての女の子の於一を愛情一杯に育てました。



於一は、お父様からいただいた本を読みながら、たくさんの方たちと、色々と意見を交換しました。

嘉永三年十一月のこと、翌年の二月に薩摩藩主となる島津斉彬公のもとへ、思いもかけない知らせが届きました。

それは、薩摩から次の將軍となる徳川家定公へ、嫁入りさせよとのことでありました。

「ありがたき知らせじゃ。しかし、嫁に出したくとも、我が家の三人の姫はまだ幼い、困った事じゃ、どうしたものかのう……」

と、その時、斉彬公の脳裏に浮かんだのが、何度か会ったこともあり、家臣の中で、女的身なれども、学問に秀でたものがあると、話題になっていた、あの於一でした。

「あの子であれば、忍耐力もあり、いまだ怒った顔を見たこともなく、不平を言ったのを聞いたこともない。また人に接するのもうまいので、將軍の御台所にピッタリであろう」と、於一に、家定公のお嫁さん候補の話が降って湧いてきたのでした。

しかし、この時はまだ、正式なものでなく、お嫁さん候補の一人に過ぎなかつたのです。



齊彬公は、分家の娘であつた於一を、家定公との結婚に当たり、自分の娘とすることにしました。そして、名前を「篤子」と改め、みんなは「篤姫」と呼びました。

嘉永六年八月、篤姫は嫁入りのために、薩摩の鶴丸城を出発して、十月には江戸の薩摩藩邸に着きますが、その道中、薩摩藩の老女であつた小野嶋が、ずうつと付き添います。

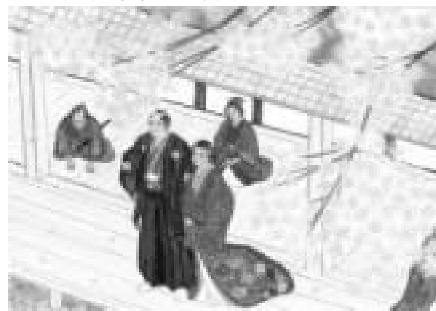
実は、この小野嶋も御本尊様を信じていて、信仰に関して、篤姫に大きな影響を与えたのではないかと思われています。

江戸に着いた翌年、大きな不幸が襲つてきました。齊彬公が重い病氣になつてしまい、その上、子供も亡くしてしまつたのです。

そこで、先に大石寺の信仰をしていた八戸藩の殿様、南部信順公が齊彬公を見舞いに来て、自分が入信したときの話しや、八戸藩の老女であつた喜佐野が、御秘符を飲んで、病気がたちまちによくなつた事などを話し、

「南無妙法蓮華經という教えは本当にすごい」と、御本尊様のすごさを話しました。

家族全員でこの話を聞き、信心をするようになり、さつそく、第五十一世日英上人様から御秘符をいただき、無事病氣が快復していききました。



様々なお寺や神社で願っても、いつこうに
よくならなかつた、その上、跡継ぎあとつの大事な
男の子を、自分が病氣と闘っている間に、亡
くしてしまつた。

そんな中、見舞いに来てくれた南部信順公のぶゆき
は、齊彬公の大叔父おおおじに当たります。

身内からされた信心の話は、ちようど真まつ
暗闇くらやみの中に、一筋ひとすじの光が差し込んだような心
持ちで、聞いたことでありましよう。

「父上様ちちうえさま、御病氣がよくなり本当にようござ
いました」

「本当よのう。南無妙法蓮華經の信仰とはも
のすごいものじゃ。それに、御秘符はかの力は計
り知れないものじゃ。ありがたい……」

齊彬公なむしめと篤姫は、嘉永七年八月に入信しま
したが、小野嶋の願い出によつて「婚礼が無
事決まるように」嘉永六年から安政三年の春
に至る足かけ四年、日英上人様は御祈念され
ました。

その願いが通じたのでしよう。正式な婚礼
決定の知らせが齊彬公へ届けられました。

そして、その御礼の御供養が、薩摩藩から
日英上人様のもとへ届けられました。



將軍の御台所となる人は、今まで宮家か公家から迎えるのが慣例となっていたため、篤姫は、婚礼の正式決定の同じ年の七月、公家の近衛忠熙の養女となりました。

実はこの近衛家は、あのお山の三門を建立御供養された、六代將軍家宣公の御台所、天英院様のご実家でありました。

薩摩から江戸へ来る道中、島津家と京都の近衛家とのつながりや、近衛家から出られた天英院様のこと、同じく大石寺の信仰をしていたことなどを、小野嶋から聞いていた篤姫は、不思議な因縁を感じました。

「願いにより、篤姫との養子縁組の手続をすませ、本日より新しき名として、『敬子』と授けようぞ」

近衛家の養女となつた篤姫は、さらに気を引き締めて準備にあたりました。

斉彬公の張り切りようは、すさまじいもので、婚礼道具の準備も全て指図し、準備が終わると、倒れ込んでしまつておぼろげになりました。



このころアメリカのペリー率いる軍艦、黒船が日本にやってきて、開国をせまってきました。

幕府として、今まで通り鎖国を続けるか、開国して外国を受け入れるか、混乱した政情が続くなか、無事婚礼の準備も整っていきました。

江戸城大奥に入る前日のことでした。

「篤姫、前もって言うっておきたいことがある」

「父上様、何でございませう」

斉彬公は、今の日本の状況を詳しく話し、

「お身体が弱い家定様の時代は長くは続くまい。次の將軍には、是非とも水戸の徳川齊昭殿の御子息である、一橋慶喜様になるように、家定公に言ってくれまいか。また、家定公のお気持ちも聞いてもらいたい」と、篤姫に言い渡しました。

これは俗に、密約といわれるもので、若い篤姫の肩に、日本の将来を左右するような、大変な使命が負わされたのでした。



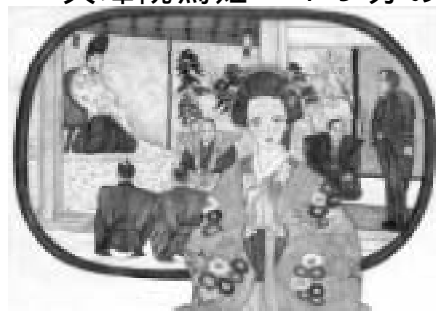
ペリー来航以来、混乱した世情を治めるため、將軍の跡継ぎ問題は、最重要なものとなっていたのでした。

「それにしても、お世継ぎさえも期待されていない將軍様とは、どんなお方であろうか？」不安な気持ちで婚礼の時を待った篤姫でしたが、十二月十八日、家定様と篤姫の結婚の儀が無事に済まされました。

家定様の趣味といえは、豆を煎って周りの者に食べさせ「おいしい、おいしい」と言っているのを見て喜ぶだけの、まるで子供のようなお方でした。

しかし、篤姫は、御台所として誠心誠意、家定様に尽くされました。

そして徳川家を守り支えていく決意が、家定様と一緒に過ごす間に、段々と強くなっていったのでした。



そんな篤姫の健気な心が、家定様にも伝わりました。

「今度、ハリスとやらがわしに会いたいと言つてきておるが、どうしたもののかのおく？」

「御台ならばどのようなふうにするかのおく？」
「などなど、色々と篤姫に相談するようになつてきました。」

篤姫の耳には、

「公方様は、おばかなお方であらされる」という、悪口のような噂が入ってきましたが、家定様と接して行けば行くほど、能力が欠けている、ばかな振りをしてるだけだ、ということがよく解りました。

「上様、ハリスとやらが会いたいと言うのであるならば、会ってみてはいかがでしょう」「ハリスが立ったまま挨拶するといふならば、分かりました、こつちにも考えがあります」と言つて、篤姫は、畳を重ねた上にイスを置き、ハリスの目線よりも上になるように会場の設定も考えました。

そして、その会見の間は、無事済むように人知れず真剣な唱題に励んでいたのです。



篤姫には、父上様から託された大事な役目がありました。それは、次の將軍に、一橋慶喜様を選んでいただくことでした。

しかし、次の將軍様は慶喜様ではなく、紀州の慶福様に決定されてしまいました。

「徳川家を残すために、どうすればいいか考えての事じゃ。慶福はまだ若い。どうか御台に後ろから支えてもらいたいと思うてのおく。慶喜では、それができないであろうからのおく」

との家定公のお言葉に、

「そこまで考えて下さつておられたのか……」
と、より深く上様をお慕いするようになりました。

ところが、次の將軍決定の間もなく、第十三代將軍家定公は、お亡くなりになってしまいました。また、その直後には父上様の、斉彬公も亡くなってしまいます。

二人の大きな支えを亡くした失意の中、篤姫は「天璋院」と名を改めて、第十四代將軍慶福改め家茂公のお母様がわりとして、二十三歳の若さで、大奥を取り仕切つて行くようになりました。

第十四代將軍になった家茂公は、まだ若干十二歳。国の政治は、大老の井伊直弼が取り仕切つていますが、直弼は強い徳川幕府の立て直しのために、幕府に反対する思想を持つ者たちを、次々に捕まえては、牢屋に入れたり、時には殺してしまいました。

そしてついに、その恨みをかい、万延元年三月三日、井伊直弼は暗殺されてしまいます。桜田門外の変でありました。



ペリー来航、安政の大地震、安政の大獄、そして桜田門外の変と、世の中の不安はますます増大し、天璋院は、国の安泰と徳川家の将来のために、その時、大地震で倒壊していた、常泉寺の復興のために、常泉寺にこられていた、日英上人様に御祈念を願い出されました。

早速その願いを聞き入れられた日英上人様は、三月十四日から閏三月を挟んで、四月五日までの五十一日間、毎日、朝四時から八時まで、昼十二時から夕方四時まで、夜六時から十時までの、一日に四時間ずつ、三回に分けた合計十二時間の唱題行を行われ、その功德によつて世の中が少しずつよくなつていきました。

天璋院も唱題に励み、真剣に祈つたことでありましょう。

日英上人様の唱題行によつて、諸願成就した天璋院は、その年の常泉寺の御会式に当たり、常泉寺へ百両と、葵と牡丹の両御紋入りの青地の金襴水引を御供養され、日英上人様へ、紙と硯と袈裟衣、それに昆布料という名目のお金を御供養されました。

また、それに先立つ七月十六日、斉彬公の三回忌に当たり、老女の小野嶋から、「これはお殿様から生前、篤姫様の婚礼に当たつて、いただいた百両であります。今回お殿様の三回忌に、御供養させて頂きたいと思ひます」と、日英上人様に御供養がありました。

その真心を受けて、その年の二月に火事によつて、焼けてしまった遠信坊の建築のために、その真心の御供養が使われ、日英上人様は、その御供養のいきさつを含めて、遠信坊の御本尊様の裏に、「斉彬公を大檀那と仰ぎ奉る」と、書きとどめられました。



さて、唱題行によって

「世の中が少しずつよくなり、天璋院が大変満足した」こととは、
具体的に何だったのでしょうか？

それは、この難局を打ち破るために考え出されたもので、時の孝明天皇の実の妹である和宮を、家茂公の嫁に迎え入れる、というものであります。

その和宮の嫁入りが、さまざまな問題がある中、唱題行によって現実のものとなつていくのでした。

権威が著しく低下した幕府は、將軍家茂公と和宮様の結婚によつて、何とか安定を計ろうと考え、朝廷もまた、政治の主導権を取り戻そうと、公武合体政策を進めたのであります。

しかし、その願ひ通りに事は進まず、終に業を煮やした朝廷は、文久二年十月、幕府に使いを派遣し、不可能な攘夷、すなわち、外国勢力を排除し、鎖国を続けるように、厳しく言つてきたのでした。

この時既に幕府は、アメリカやフランスと条約をむすんでおり、鎖国は不可能な状態となつておりました。

將軍家茂公この時十七歳。若き上様の両肩には、ずつしりと政治の責任がのしかかつておりました。



明けて文久三年二月、家茂公は朝廷との関係を改善するため、三代將軍家光公いえみつ以来、実に二百四十年ぶりとなる上洛じょうらく、京都の天皇にお会いしに行かれたのでした。

將軍は京都に行かれると、二条城にじょうじょうというところに入られますが、その二条城におられる家茂公いえもちへ、天璋院よりお手紙が届きました。

「お題目を唱えて、無事帰られることを祈っております。とにかく信心が第一でございませう」

と、家茂公の無事を強く祈る、まさに子を思う母親の姿がそこにありました。

その母がわりである天璋院に、家茂公は、何でも相談し、天璋院の折伏によつて、家茂公も信心をするようにもなっていました。

さらに、天璋院は、家茂公が無事江戸城に帰つてこられるように、日英上人様に御祈念を願ひ出られました。

その御祈念と天璋院の祈りが通じたのでしよう、三ヶ月後の六月に、家茂公は無事帰つてまいりました。

すぐさま、天璋院は日英上人様へ十五両の御供養をされております。



大奥では平和な一時ひとときが流れました。京都から来た和宮も、だんだんと江戸の暮らしにも慣れて、特に家茂公の優しい人柄ひとがらに引き込まれ、心からお慕したいするようになっていきました。

將軍の妻としての自覚じかくを強く持つようになった和宮に対し、天璋院は、和宮と力を合わせて、徳川家を、そして家茂公を、末永く盛り立てていく決心を、より深めていきました。

しかし、幸せな時は長くは続きません。

同じ年の年末、家茂公は二度目の上洛のために出発し、船を使つて京都をめざし、明け
て一月には二条城に入りました。

翌、慶応元年五月には、長州藩ちゆうしゅうはん、今の山口県と幕府との間に戦争が起こり、その征伐せいばつのために長州に向かいましたが、翌年の夏には、その戦争が激化げきかし、家茂公は幕府軍の総大將として、闘いを指揮しました。

そしてとうとう、あまりの激務げきむのため、身も心もズタズタになって、七月二十日、大阪城にて亡くなってしまったのです。家茂公たった二十一歳でした。

和宮は、まるで天璋院の人生と同じような道を、たどつていくことになりました。

夫を亡くした悲しさを胸に、天璋院と一緒に徳川家を守り支えていく決意をするのでした。



家茂公が亡き後は、天璋院が密約を授かつてまで將軍に推していた、慶喜様が第十五代將軍とられました。

慶喜様も主に京都におられたため、將軍不在の江戸城を、実質的に天璋院と和宮と二人力を合わせて、守っていたのでした。

徳川幕府二百六十年の歴史も、今はその権威もことごとく無くなり、世の中は幕府を倒そうという、討幕運動の嵐が吹いていました。

慶喜公は日々その打開策を練っていました。が、慶応三年十月、二条城において、

「日本を統治する権限を、天皇にお返しいたします」

と、大政奉還の意志を表したのでした。

しかし、大政が天皇に返上されたからといって、徳川家には、五百万石という膨大な領地と、日本最強の陸軍と海軍の力が残ったままです。

勢いのついた討幕派は、このような状態を許せるはずがありません、大政奉還の後も、新体制を作り上げ、徳川家との対決姿勢を強めていくのでした。



その討幕派の中心は、天璋院の実家である薩摩と、家茂公が征伐に赴いた長州でした。

薩摩と長州が手を結び、本格的な倒幕活動を展開していくのでした。

その指揮官は、薩摩島津家の家臣、西郷隆盛でした。

また、薩摩軍に打倒幕府の指令を出したのは、婚約者が決まっていた和宮へ、將軍様への嫁入りを、強く進めた岩倉具視でした。

そして、倒幕軍の総大将は、その和宮のかつての婚約者であつた、有栖川宮熾仁親王でした。

慶応四年一月三日、江戸時代最後の年の正月、鳥羽伏見の戦いが始まりました。

圧倒的な兵力の幕府軍でしたが、倒幕軍の最新兵器の前にもろくも敗れ去り、朝廷から慶喜追討の令が出され、朝敵となつた慶喜公は、ひそかに江戸に逃げ帰つてしまいました。

錦の御旗を掲げた官軍は、一気に江戸城に攻め入ろうと進んでまいります。その倒幕軍の中心が、実家の島津家であることに、

「私の嫁ぎ先の徳川家を、潰そうというのか。私が何とかしなくては……？」

と強く感じた天璋院は、西郷隆盛に、

「徳川に嫁いだ以上は、徳川家の士となり、徳川家が安全に長らえることを願っています。江戸城を攻撃するのなら、薩摩出身のこの私を、殺す覚悟でおやりなさい……」

と、千二百字にも及ぶ長文の手紙を書きました。



同時に、和宮も官軍に向けて、江戸城攻撃の中止を要請する手紙を出していました。

歴史的には、倒幕軍代表・西郷隆盛と、幕府軍代表・勝海舟が、直接江戸薩摩藩邸で会談し、江戸城の総攻撃が中止されたことになっていますが、そのかげには、主無き江戸城を、命がけで守った、天璋院と和宮の働きかけがあつたのであります。

一方江戸城では、幕府の家臣たちが、官軍との徹底抗戦を主張して、譲りませんでした。慶喜公はその時、もう江戸城にはおらず、官軍に恭順の姿を示し謹慎しておりました。

戦いとなれば、やるかやられるか。江戸は戦場と化し、町は火の海となり、江戸城も焼け崩れ、多くの犠牲が出てしまいました。

何とかそれを回避し、徳川家を存続させた。それが天璋院の強い願いでした。その願いが通じ、江戸城は無血開城されました。

天璋院は、最後まで江戸城に残り、千人にも及ぶ奥女中が、無事お城から出て行くのを見届けました。

また、徳川家伝来の宝物を美しく飾り、徳川家の栄華を示しました。

それを目の当たりにした官軍は、天璋院の引き際の美しさに驚きました。



天璋院は、宝物など何一つ必要ありませんでした。故郷、薩摩の絵が描かれている一幅の掛け軸だけあれば、それで充分でした。

また、自分が日英上人様からいただいた、御本尊様だけは、どんなことがあっても肌身離さず、持ち続けました。

その大石寺の信仰を、天璋院へ教えてくれた、小野嶋が亡くなつたという知らせが届きました。一番の基本に御本尊様を信じていくことや、日英上人様と縁させてくれたのも、小野嶋でした。

小野嶋は何度となく、天璋院の使で、日英上人様へ御供養をお届けしました。天璋院にとつて、小野嶋から受けた影響は大きく、亡くなつたとの知らせに、今までの様々なことを思い出しておりました。

あの五十一日間の大唱題行により、和宮の嫁入りから、江戸城の無血開城に至るまで、御本尊様の功德に包まれ、願い通り徳川家を守ることができたことに、感謝の気持ちで一杯でした。

「小野嶋、ありがとう……
慶喜公もおとがめ無く、領地は大幅に減らされましたが、駿府、今の静岡県に、七十万石を与えられ、徳川宗家を家達にゆずりました。家達は、その時わずかに六歳、その養育に当たつたのが、また天璋院でした。」

天璋院は家達を我が子同然に可愛がり、家達もまた天璋院に孝養を尽くし、真の親子も及ばないような関係でありました。



最後まで徳川家繁栄のため、家達を養育し、イギリスにも留学させ、自身は、東京で裁縫に従事しながら生活し、勝海舟や和宮ともしばしば会い、以前に比べ、のんびりとした平穏な日々でありました。

ところが、明治十年のことです。「和宮様がお亡くなりになりました」との知らせが届きました。

立場こそ違え、自分と同じような境遇を味わい、共に江戸城の最後を守り抜いた、戦友の死に際して、感慨深いものがありました。

明治十五年、イギリスに留学中の家達を呼び寄せました。それは結婚のためでした。

天璋院自らが選んだその結婚相手は、自身の縁戚にあたり、また、同じ信心をしていた天英院の家系で、公家の近衛忠熙の孫でした。それはあくまでも、徳川家の安泰を考えての御結婚でありました。

明治十五年十一月六日、家達がその方と結婚し、徳川家の行く末に道筋をつけたことを確認し、約一年後の明治十六年十一月二十日、安心したかのように四十九歳で亡くなりました。

江戸時代から明治へ転換する激動の時代に、名が上がる男たちは数々あれど、女として強く気高く生き抜き、当時の日本の運命を かげから大きく支えたお方、それが天璋院でありました。

特に、そのお方が私たちと同じ信心をしていたということとは、大きな励みではないでしょうか？

大唱題行に見られるような、真剣に祈れば、道は開けることを、天璋院は教えていると思えてなりません。以上で終わります。